

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：26401
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24653152
 研究課題名(和文) ソーシャルワーカーの実践的コンピテンスの構成要素と形成過程に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of competence formation process of social worker

研究代表者

丸山 裕子 (MARUYAMA, HIROKO)

高知県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00295156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ソーシャルワーカーの自らの実践的力形成過程に関する主観的理解を切り口とする聴き取り調査から理解されたことは次の4点である。

(1) 社会福祉学を学ぶ動機はどうか、学びを自らの多様な生活経験と資質とを意識的に統合しようとする過程が不可欠であること(2) 自らの生活体験の延長として、弱い立場にある人々の生活背景に向けられるまなざしが内在化されていること(3) 援助専門職に限らず、多様な業種の他者との出会いとその対照として専門性を考察する機会が重要であること(4) 大学における授業というよりは、教員、実習指導者、先輩といったソーシャルワークを体現する「人」が、専門性の継承に大きな意味をもつこと

研究成果の概要(英文)：The main research results are the following four points.(1)The process that is going to integrate nature with own life experience is important factor in competence formation process of social work profession. (2)The interest in living condition of the socially vulnerable people is internalized, and being (in the life experience of own as a base). (3)An opportunity to consider competence of social work profession as the encounter with the others of various types of profession and the contrast is very important. (4) "A person" embodying in a teacher, a supervisor, value of the social work such as the senior have strong influence to competence formation process of social worker.

研究分野：ソーシャルワーク論

キーワード：ソーシャルワーカーの技術 実践的コンピテンス 力量形成過程 第2次分野 自己覚知 独立開業社会福祉士

1. 研究開始当初の背景

ソーシャルワーク実践研究は、その過程を研究する以外に方法はないとの認識のもと一貫して研究を継続してきた。研究代表者の中では、実践・研究・教育は分かち難く存在している。

教育としての切り口では、研究代表者として、平成 15-17 年度基盤研究C(1)「ソーシャルワーク実践過程へのコンピュータ活用による教育支援システムの研究」が採択された。それらの成果をまとめた太田義弘監修「ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング 利用者参加へのコンピュータ支援」(CD-ROM 付)が、2005(平成 17)年 8 月に中央法規から出版された。また、平成 21 年度からは、研究代表者として「ソーシャルワーク演習を中心とした教育プログラムに関する総合的研究」が桃山学院大学共同研究として採択された。上記の研究はいずれも、ツールの活用やプログラムといった教育システムの整備につながる研究が主であった。これらの研究や実習教育へのかかわりから、1 人のソーシャルワーカーが現場で有用な存在として理解され、その背景には確かな専門性の裏打ちがあると認知されるような実践的力量を形成していく過程への関心を深めている。実践を体現するソーシャルワーカー側に視点を移して実践的力量の形成過程を探ることにより、現任教育やスーパービジョンも含めた広い意味でのソーシャルワーク教育に反映することが必要不可欠であると考え、本研究を着想するに至った。

ソーシャルワーカーとして入職後の経験年数による力量獲得過程に関する比較研究などの先行研究は散見されるものの、就職以前、最初に受けた専門教育を実践力の基盤となる枠組みとして本人が自らの潜在的な「資質」とマッチングさせつつ、統合していく過程に焦点をあてた研究は他に類をみない。

本研究では、第 2 次分野や独立開業で活動する個々のソーシャルワーカーの主観的理解を切り口として、主に入職以前を中心に、そこに共通する実践的力量に影響を与える要素の抽出と形成過程の局面の整理を試みようとしている点で、新たなチャレンジと位置づけることができるのではないかと考えている。

2. 研究の目的

社会福祉という学問領域は、理論的整合性のみで完結するのではなく、理論を敷衍する実践活動を伴っていることが大きな特徴であるといえる。この実践活動の担い手として、社会福祉士が国家資格化させ、20 余年が経過した。研究代表者自身が、約 13 年間勤務した精神医学ソーシャルワーカー(以下 P S W と略)としての現場を離れ、教育・研究者となり、ほぼ同じ年月が経過した。これまでの、双方における経験から、以下のことに興味をもつようになった。(1) 目に見える技術を

有し、比較的専門性が伝えやすい隣接領域の医療関連専門職に比すると、社会福祉士はその個人に専門性の依存度が高いこと (2) その背景に社会科学の基礎とともに、専門性とは一見矛盾するような幅広い教養と社会常識が求められること (3) 国家資格化がソーシャルワーカーとしての専門性の向上や質の担保に反映されているとはいいたいこと、である。いずれも、ソーシャルワーカーの実践的力量に関連している。

本研究では、非常に複雑で表現することがむずかしい、ソーシャルワーカーの実践的力量はどのような要素から成り立っており、それらはどのように相互に影響を与えつつ、統合され、実践力として形成されていくのか、さらにそれらの形成過程に特に大きな影響を与えている要因は何かを明らかにできればと考えている。

3. 研究の方法

(1) 研究開始当初の計画・方法

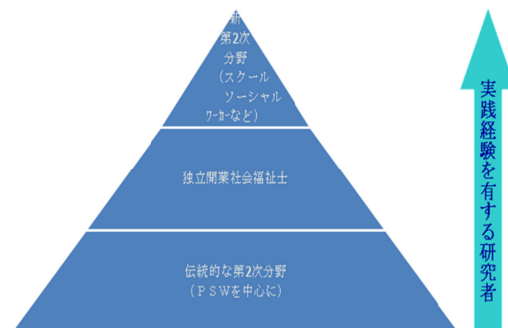


図 1 研究計画イメージ

本研究は、ソーシャルワーカーが語る主観的理解を切り口として、実践的力量に大きな影響を与えていると考えられる要素の抽出とそれらの相互作用と統合による力量形成過程に共通する局面の整理、までの基礎研究を目的としている。

調査対象として、第 2 次分野で活動するソーシャルワーカーを選択したのは、主たる目的が社会福祉ではない領域で少数職種として仕事をするということは、他職種との比較からも自らの専門性と存在意義をいやおうなく、日々問われると考えたからである。また、独立開業社会福祉士は、理由は個々それぞれであるが、それまで勤務していた施設・機関の枠の中では、自らの考える社会福祉士の仕事ができないと専門性と向き合い、突き詰めて考慮した経験を有すると考えたからである。いずれも、10 年以上の経験を有するソーシャルワーカーを対象とした。特に、本研究の基盤となる比較的歴史のある第 2 次分野で活動する P S W や医療ソーシャルワーカー(以下 M S W と略)の方たちは、研究代表者がこれまでの実践現場や実習教育・研究活動の中にかかわりを持ち、「実践的力量が高い」「ソーシャルワークを体現で

きる」と主観的に感じた経験 10 年以上のソーシャルワーカーの方を対象とした。

第 2 次分野においては、比較的伝統のある医療ソーシャルワーカー（以下 M S W と略）と P S W の方への自らの実践的力量的形成過程に関する聞き取り調査による共通要素の分析と考察

の結果に基づき、質問項目を整理し、独立開業社会福祉士の方への聞き取り調査に基づく共通要素の分析と考察

と の聞き取りの比較考察による共通要素の整理

スクールソーシャルワーカー、産業ソーシャルワーカー、司法ソーシャルワーカー等に比べると新しい第 2 次分野における共通要素の分析と整理

と あるいは と の比較考察の結果も含め、実践経験を有するソーシャルワーク論研究者の協力による共通要素の検討

(2) 調査対象者

結果としての調査対象者は、上記研究計画イメージ図の伝統的な第 2 次分野として M S W が 2 名、M S W と P S W 兼任が 1 名、P S W が 3 名の計 6 名と、独立開業社会福祉士が 2 名の計 8 名である。当初予定していたスクールソーシャルワーカー、産業ソーシャルワーカーや司法ソーシャルワーカーなどの新しい第 2 次分野のソーシャルワーカーへの聞き取りは行えていない。

上記、研究方法の まででとどまっている。

(3) 調査内容

聞き取り調査は、以下の 5 点については共通でたずねた。いずれも、「現在からふりかき、主観的にどうとらえているか」を話していただいた。他はエピソードなども含め、対象者の方から自由に語ってもらう方法をとった。

現在に至るまでの職歴と最初に社会福祉学を学んだ場所

ソーシャルワーカーになった動機と経緯

現在の仕事につながる社会福祉学を学ぶ以前の経験

現在の実践力につながる学生時代の経験（社会福祉学を最初に学んだ場における経験）

入職して後の経験

4 . 研究成果

(1) 伝統的 第 2 次分野である P S W ・ M S W の聞き取り調査

調査から理解されたいくつかの共通点について概説したい。

6 名全員が大学において社会福祉学を学んでいた。また、職場を変えることはあっても、M S W や P S W としての職種は継続していた。

社会福祉系大学入学の動機は、多様であ

り、社会福祉専門職をめざしてという返答はゼロ。また、意外にも推薦入試の枠があったから、そこしか受からなかったから、友人が福祉系を希望していたから 等というように積極的な選択の結果という返答はほとんどみられなかった。

今の実践力につながる社会福祉系大学の学生時代の経験について、教員、サークル活動における先輩、後輩、他学部や他大学の学生との交流、アルバイト先（社会福祉以外）での経験が共通して語られた。また、全員ではないが、「授業で何を学んだか思い出せないあるいは覚えていないが」といった前おきの後に話しはじめるという共通点がみられた。直接的、あるいは間接的に大学という「場」を通じての「人との出会い」の影響は大きいようである。また、大学生という位置づけも重要な意味をもっているような印象を受けた。

社会福祉学を学ぶ以前の経験としては、家族や親戚、友人、近隣に障害者といわれる人や社会的に弱い立場にある人たちとの出会いと気にかけるまなざしがエピソードの中に織り込まれていた。そこには、その特定の個人を超えて、同様の状況におかれている人々の生活を想像しようとする視点が含まれているように感じられた。社会福祉学を学び、実践を積み重ねた過程で、自らの中で統合したその結果であるのかもしれない。

入職後の経験としては、第 2 次分野の特徴でもある、他職種とのかかわりの中で、自らの専門性を考えたさまざまなエピソードが語られた。また、先輩ソーシャルワーカーの存在とその影響についても、ふれられていた。さらに、仕事を継続する中で、「これでいいのか」と悩み、挫折した経験とそれとどう向き合ってきたかが、現在の実践力に影響を与えているとソーシャルワーカー自身がとらえていることが理解できた。

(2) 独立開業社会福祉士からの聞き取り調査

上述したように 2 名の方からお話を聞くことができた。ここでは、2 名の方の共通点というよりは、(1) 伝統的 第 2 次分野である P S W ・ M S W の聞き取り調査との共通点について気がついたことを述べるにとどめたい。

2 名の方とも大学で社会福祉学を学んでいた。独立開業社会福祉士の方が、今回の調査時点での最高年齢 55 歳であった。1 名の方の開業前の職種は M S W であった。

2 名の方は同じ大学で学んでいることがわかった。また、社会福祉系大学入学の動機は、(1) の対象者に比べると明確であった。

社会福祉系大学の学生時代の経験にお

いては、(1)と同様のエピソードが語られていた。また、(1)の数人の方からも関連する内容が語られていたが、大学進学のため親元をはなれ、自らの生活体験が現在の実践力につながる重要な事柄としてあがってきていたのは興味深かった。

についても(1)と同様の内容が語られていた。

の入職後の経験に関しては、「これでいいのか」と悩み、挫折した経験とそれにどう向き合ってきたか、が現在の実践力に影響を与えているとソーシャルワーカー自身がとらえているところは共通している。その結果として、独立開業という道を選択したということが、(1)とは異なる点である。この点に関しては、さらなる独立開業社会福祉士の方への聴き取りの蓄積が必要である。

調査協力者8名のうち、3名が仕事を継続しながら、大学院修士課程で学ぶ経験をしていた。いずれも、MSWであるという共通点があった。また、職能団体の役割を担い、後輩の育成(教育)にも関心を持ち、積極的に関与しているという点でも共通していた。

スポーツや武道における経験の影響についても、4名の方からお話があった。

(3)まとめにかえて

研究代表者がこれまでの実践現場や実習教育や研究活動の中で、かかわりを持ち、「実践的力が高い」「ソーシャルワークを体現できる」と主観的に感じた経験10年以上で、現職のMSW・PSWの方たちに、自らの力量形成に影響を与えていると考える事柄をエピソードなども含めて語ってもらう面接形式の聴き取り調査、という主観という語が重複するある意味昨今のエビデンス・ベースの流れに反するような研究方法をとったことにより、聴き取り調査の貴重なデータを十分に整理・分析できていない自らの力量不足を実感している。一方で、調査協力者の方のお話に耳を傾けながら、専門職としての力量形成の過程をふりかえることであるとともに、ライフヒストリーにもふれる部分もありそれらが分かちがたく存在しているところに、ソーシャルワーク専門職の特性と奥深さを感じ、ひさしぶりに研究者としての意識を刺激された。協力者の方からは、聞かれることによりふりかえりながら、自分がどう考えているのかがわかったなどの感想をいただいたが、「この話で(研究として)大丈夫なの、まとまるの」と心配もしていただいた。

協力者の方のお一人の言葉が忘れられない。「不確定なものをこわがらない、リスクを負い、努力、工夫すること」

現時点では、研究代表者の印象の域を出ないが、聴き取り調査を通して、実践的コンピ

テンスの形成過程について気づいた点を以下に整理しておきたい。

社会福祉学を学ぼうとした動機はどうであれ、自らのさまざまな生活経験と資質を統合しようとする過程が実践力の形成に関与していること

その過程で、自らの生活体験の延長として、弱い立場にある人たちの生活背景にむけられるまなざしが内在化されていること

援助専門職に限らず、さまざまな業種の他者との出会いとその対照として専門性を考察する機会が重要であること

大学における授業というよりは、教員、実習指導者、先輩といったソーシャルワークの価値を体現する「人」が、専門性の継承へ大きな影響力をもつこと

現時点では、十分にまとめることができなかったが、他にも調査協力者の方々の心に残るフレーズやエピソードにあふれており、貴重な宝物として、ソーシャルワーカーの実践的コンピテンス向上の研究や新たなソーシャルワークの方法開発に反映させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

伊藤佳代子、独立型社会福祉士の開業システム構築に関する研究 弁護士へのインタビュー調査を通して、別府大学短期大学部紀要、査読無、(34)、2015、77-87

丸山 裕子、ハイリスクな状態にある利用者システムへのチーム・アセスメント支援ツールの研究() ソーシャルワーカーへのヒアリング調査と実践検証からの考察、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、第39巻1号、2013、1-18

丸山 裕子、社会福祉士養成教育におけるソーシャルワーク演習の位置と課題 担当教員からのヒアリング調査にもとづく考察、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、第38巻第1号、2012、211-224

〔学会発表〕(計 件)

なし

〔図書〕(計 2 件)

丸山 裕子他、中央法規、新精神保健福祉士養成講座精神保健福祉の理論と相談援助の展開 第2版、2014、353

丸山 裕子、西村膳写堂、平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書ハイリスクな状態にある利用者システムへのチーム・アセスメント支援ツールの研究、2014、50

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 裕子 (MARUYAMA, Hiroko)
高知県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：00295156

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

伊藤 佳代子 (ITO, Kayoko)
別府大学短期大学部・教授
研究者番号：10390361